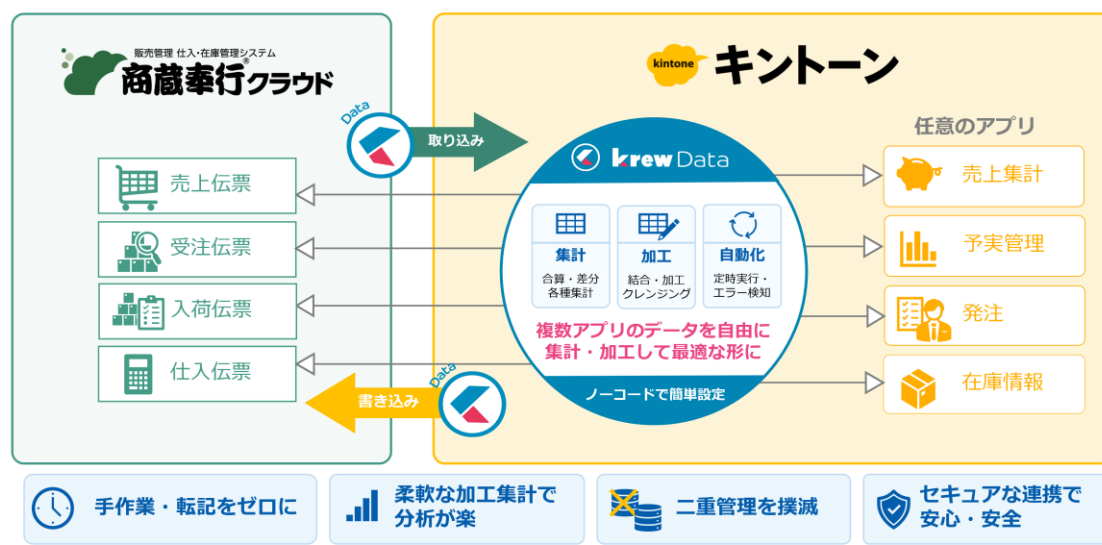




奉行連携 オプション

やさしく解説

商奉行クラウド/蔵奉行クラウドのデータをkintoneで"使える・活かせる"！
krewData奉行連携オプションでデータ連携と活用を自動化



本資料ではkrewDataの奉行連携オプションのポイントを解説します。
対象者：krewData管理者の方、奉行連携オプションを設定する方

● 奉行連携オプション設定方法

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLCuy-8URTCUhrQv7XQsdci0atmiDMTxSg>

概要

奉行連携オプションは、奉行クラウドとkintoneのデータを双方向に連携できるkrewDataのオプション機能です。データの入出力に加えて、krewDataのデータ編集・加工機能を使うことで売上分析や予実集計など、データ活用を強力に支援します。

■対応サービス

- ・ 商奉行クラウド
- ・ 蔵奉行クラウド

krewDataの奉行連携オプションの特徴

奉行連携オプションは次のような特徴があります。

- ・ 奉行クラウドの全項目を連携できる

※一部対象外があります。

https://docs.krew.mescius.jp/krewdata/#bugyo_limitations.html

- ・ 実行時にデータ処理が行える

krewDataはデータの加工・集計ができる製品なので、データを取得するだけでなく、予実集計や実績集計など加工処理もあわせて行えます。

kintoneから奉行にデータを登録する際の注意点

連携時の注意点

奉行出力コマンドを使うと、krewDataはデータ編集フローの結果で奉行クラウド上の業務データを直接追加、または更新します。データ編集フローの設定を誤った場合、意図しないデータが更新される可能性があります。データ編集フローを実行する前に設定内容を十分に確認し、事前検証を必ず行うようにしてください。

■krewData製品ヘルプ

奉行連携利用時の重要な注意事項：

https://docs.krew.mescius.jp/krewdata/#bugyo_cution.html

1. プロセス管理を追加設定する

出力時に正しいデータが奉行クラウドに登録されるよう、運用の工夫を入れていただくと安心して運用いただけます。

- 奉行に登録する前にkintoneのプロセス管理機能を使って登録のための承認を行う
登録するデータは下記のようにプロセス管理で承認を得てから登録する運用が望ましいです。

krewDataではどのデータを扱うか条件付けするフィルタ機能があります。これを使い、奉行に登録してもよいレコードだけを対象に奉行クラウドに連携することが可能です。

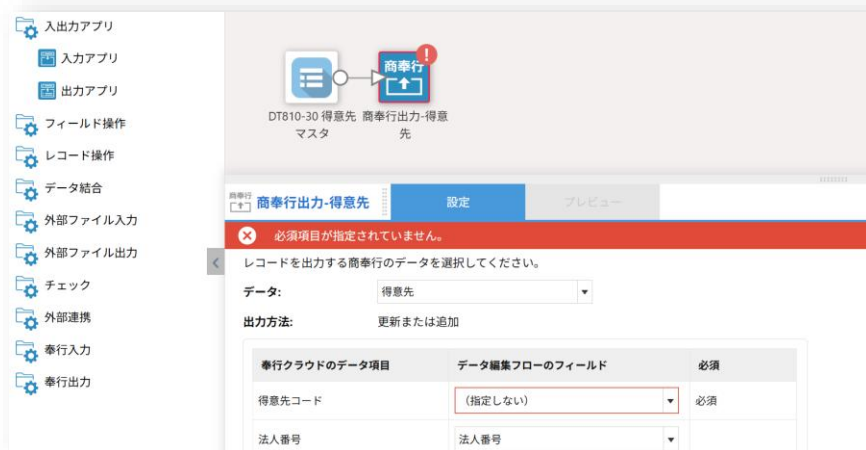
2. データチェック

1はデータが正しいかチェックするものではなく、社内で確認されたデータかどうかを確認する意味合いの運用方法でした。

次にご紹介したいのは、データが正しいかどうかをチェックする方法です。

1. 必須項目のチェック

- krewDataの出力コマンドで、奉行クラウドの項目とkrewDataのデータ編集フロー内で処理した項目を紐づける設定を行います。この時、奉行で必須となる項目が選択されていない場合には下記のようにエラーが表示されます。



2. その他のチェック

必須以外に、桁数や形式など確認したい観点は次の方法で検知が可能です。

- kintoneアプリの設定で入力時にエラー気づきを与える
 - 桁数の制限を設定する
https://jp.kintone.help/k/ja/app/form/othersettings/significant_figures
 - 必須項目を設定する
https://jp.kintone.help/k/ja/id/040554#form_set_form_30
- krewDataのデータチェックコマンドでチェックする
 - チェックできる項目はこちらに記載しています。
https://docs.krew.mescius.jp/krewdata/#command_data_check_items.html

ここまでご紹介した方法はkrewDataの設定/実行時にエラーとなって認識できるものです。実行前のタイミングでエラーを検知したい場合には奉行に連携するフロー以外にデータチェックのフローを設定しておくのがおすすめです。

スナップショットの作成について

スナップショットの必要性

奉行入力コマンドを使用すると奉行クラウドのデータを直接取得してフロー内でデータの加工処理が行えます。しかしながら、実際に運用していく際にはスナップショットデータを用意しておく安全に利用できます。

例えば、フロー内で直接データを加工している状態で、データの異常値が見つかったとします。その際、なぜそれが異常値になっているかを確認するためにはその当日の集計の元となるデータをさかのぼりたいものです。奉行クラウドから取得したデータを直接加工してしまうとこの対応ができなくなってしまいます。

スナップショットが必要なのはトランザクションと呼ばれるデータです。

例) 売上、在庫、仕入れ

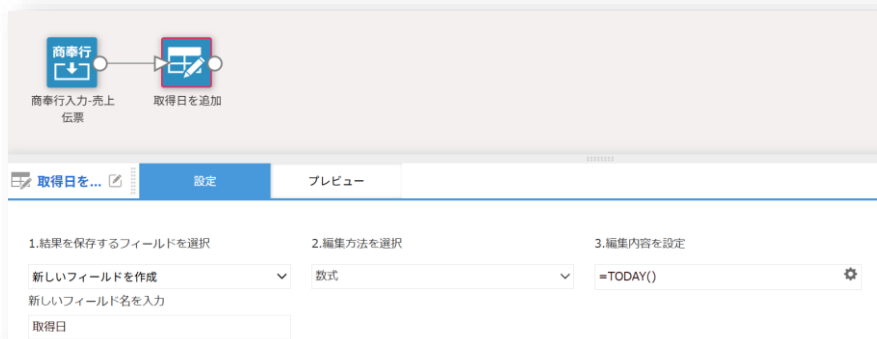
スナップショットが不要なのはマスタなどのデータです。

運用方法

売上集計など集計用のフローとは別にスナップショットを保存するためのフローを用意する方法が一般的です。（同じフロー内で中間データ用のアプリにデータ出力する方法でも問題ありません）このほかにも外部入出力機能を使用して外部のクラウドストレージにデータを保管しておくのもよいでしょう。

■手順

1. krewDataでデータ取得日の項目を追加する



2. 出力アプリにデータを「追加」する

これにより過去にさかのぼって、その時の参照データを確認できる状態になります。

スケジュール実行とリアルタイム実行の違い

奉行連携オプションはkrewDataのスケジュール実行プラン/リアルタイム実行プランの両方で利用可能です。それぞれ次のタイミングで実行が可能です。

- スケジュール実行プラン
 - krewDataで設定した時刻にフローを実行
- リアルタイム実行プラン \kintone起点でしかkrewDataを実行できない／
 - kintoneのWebhookが動いたとき（常に動くのではなくレコード追加時のみなど選択可能）
 - krewDataのAPIを呼び出したとき

リアルタイム実行プランが向いている業務

リアルタイム実行プランはkintone側できっかけをkrewDataに与える際にフローが動きます。

例1) kintoneで管理している顧客アプリで新規に登録を行ったので奉行にレコード登録をしたい
これは顧客アプリでプロセス管理の承認が下りたことをきっかけに奉行クラウドにデータを連携できるので向いているケースです。

例2) 奉行に登録してある得意先マスタの情報をkintoneに同期したい
これは、kintone側で何かしらきっかけを起こす必要があるので向いていないケースです。